

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト オスカ みよ、なんぢはじゅうじかにてしを  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほろぼし、とうぞくのためにくえんをひ  
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開  
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ  
 攜 香 女 悲 慰  
 め、しとになんぢがふくか つして、せか  
 使 徒 爾 復 活 界  
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ  
 大 憐 賜 傳  
 させたまえり。

【 生神女進堂祭のトロパリ 第4調 】

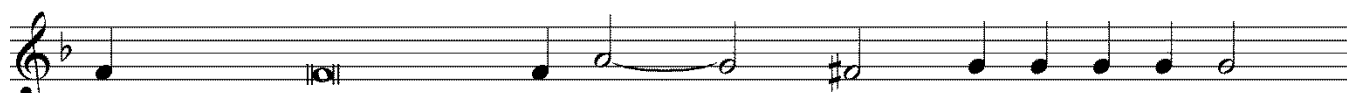
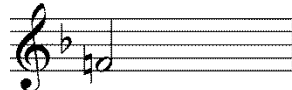
こんにちかみのめぐみはしめさあ、ひ  
 今日 神 恩 恵 示 人  
 とびとのすくいはずたえらる。どうてい  
 人 救 傳 童 貞  
 ぢよはあきらかにかみのでんにあらわれて、  
 女 明 神 殿 現  
 あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。  
 預 衆 人 知


  
 われらもこえをあげてかれによばん。ぞう  
 我等 聲 揚 彼 呼 造  
  

  
 ぶつしゅのおもんばかりとじょうじゅなるものよ、  
 物 主 思 慮 成 就 者  
  

  
 よろこべよ。  
 慶

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】


  
 こうえいはちちとこ と せいしんにき  
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸  
  

  
 す、


  
 しとひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠  
  

  
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖  
  

  
 なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛  
  

  
 にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光  
  

  
 しよ お しゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
 照 お 者、 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのたあめ、および  
 爾羊群爲及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい  
 全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。  
 三者祈給

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
 今何時も世世

きゆうせいしゆのいきよおきでん、いたりて  
 救世主最淨殿至

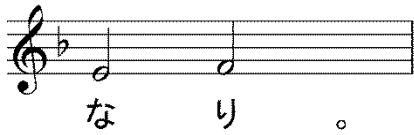
とおときみや、かみのこうえいのせいに  
 貴宮神光榮聖

せられしほうぞうたるどうていぢよおは  
 宝蔵童貞女

こんにちしゆのいえにいれられて、せいしんのおんちよ  
 今日主家入聖神恩

うをともにいらしむ。かみのつかいら等  
 共入神使等

はかれをうたいていう、これてんのまく  
 彼を歌曰う、此天幕



な り 。

司祭) ( 黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行つる者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅  
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世  
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇  
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) プロキメン、<sup>しゅ そのたみ ちから たま</sup> 主は其民に力を賜い、<sup>しゅ そのたみ へいあん ふく くだ</sup> 主は其民に平安の福を降さん、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主

そ の た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ  
其 民 平 安 福 降

さ ん。

誦經) <sup>かみ しょし</sup> 神の諸子よ、<sup>しゅ けん</sup> 主に獻ぜよ、<sup>こうえい せんき</sup> 光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、<sup>しゅ けん</sup>

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主

そ の た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ  
其 民 平 安 福 降

さ ん。

誦經) <sup>しゅ そのたみ ちから たま</sup> 主は其民に力を賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く  
主 其 民 平 安 福 降

だ さ ん。

【 使徒經 (アポストロス) 221 端 エフェス書2章14節~22節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、ハリストスは我等の和平なり、二の者を一と爲し、隔の墻を毀ち、己

の身を以て仇を廢し、教を以て諸誠の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者

を以て、己に於て、一の新なる人を造り、又十字架にて仇を殺し、此を以て、

一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲なり。且來りて、爾等遠き者及び近

き者に和平を福音せり、蓋彼に由りて、我等二の者は、一の神に在りて、父に近

づくを得るなり。故に爾等既に異民、或は他邦の人たらず、乃諸聖徒の同邦の人、

神の家屬なり、爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イイスス・ハリストス

は自ら其隅石なり。此の上に全屋は組み立てられ、次第に築きて、主に於ける聖殿と

爲る、此の上に爾等も、神に由りて、神の居處として、共に建てらるるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

\*\*\*\*\*

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>しじょうしゃ</sup> 至上者よ、<sup>しゅ</sup> 主を<sup>さんえい</sup> 讚榮し、<sup>なんぢ</sup> 爾の名に<sup>な</sup> 歌<sup>うた</sup> うは<sup>び</sup> 美<sup>かな</sup> なる哉、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>あわれみ</sup> 憐を<sup>あさ</sup> 朝に<sup>の</sup> 宣べ、<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>まこと</sup> 眞を<sup>よ</sup> 夜に<sup>の</sup> 宣ぶるは<sup>び</sup> 美<sup>かな</sup> なる哉、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup> 人を<sup>あい</sup> 愛する<sup>しゅざい</sup> 主宰よ、<sup>わ</sup> 我が<sup>こころ</sup> 心に<sup>かみ</sup> 神を知る<sup>ちえ</sup> 智慧の<sup>いさぎよ</sup> 浄き<sup>ひかり</sup> 光を<sup>かがや</sup> 輝かし、<sup>わ</sup> 我が<sup>しねん</sup> 思念

<sup>め</sup> の目を<sup>ひら</sup> 啓きて、<sup>なんぢ</sup> 爾が<sup>ふくいん</sup> 福音の<sup>おしえ</sup> 教を<sup>さと</sup> 悟らしめ<sup>たま</sup> 給え、<sup>わ</sup> 我が<sup>うち</sup> 衷に<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>ふく</sup> 福たる<sup>いましめ</sup> 誠を

<sup>おそ</sup> 畏るる<sup>おそれ</sup> 畏をも<sup>い</sup> 入れて、<sup>われら</sup> 我等が<sup>ことごと</sup> 悉くの<sup>にくたい</sup> 肉體の<sup>よく</sup> 慾を<sup>ふ</sup> 踏み、<sup>およ</sup> 凡そ<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>よろこ</sup> 喜ぶ<sup>ところ</sup> 所

を<sup>おも</sup> 思い<sup>か</sup> 且つ<sup>おこな</sup> 行いて、<sup>ぞくしん</sup> 属神の<sup>せいかつ</sup> 生活を<sup>す</sup> 過ぐるを<sup>いた</sup> 致させ<sup>たま</sup> 給え、<sup>けだし</sup> 蓋<sup>かみ</sup> ハリストス<sup>かみ</sup> 神よ、

<sup>なんぢ</sup> 爾は<sup>わ</sup> 我が<sup>たましい</sup> 靈と<sup>からだ</sup> 體との<sup>こうしょう</sup> 光照なり、<sup>われらなんぢ</sup> 我等<sup>なんぢ</sup> 爾と<sup>むげん</sup> 爾の<sup>ちち</sup> 無原の<sup>しせいしぜん</sup> 父と<sup>しせいしぜん</sup> 至聖至善にし

て<sup>いのち</sup> 生命を<sup>ほどこ</sup> 施す<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>しん</sup> 神とに<sup>こうえい</sup> 光榮を<sup>けん</sup> 獻ず、<sup>いま</sup> 今も<sup>いつ</sup> 何時も<sup>よよ</sup> 世々に、<sup>あみん</sup> アミン。 )

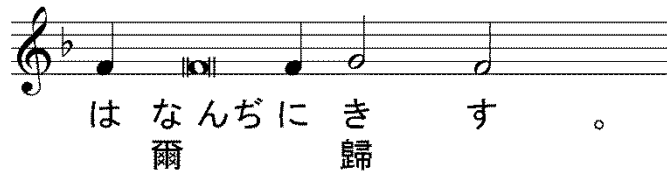


【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 66 端 12 章 16~21 節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き しゅ さ たとえ もう い あると ひと たはた よ みの</sup> 謹みて聴くべし、) 主は左の譬を設けて曰えり、或富める人に田畝の善く實れるあり、

<sup>かれみづか はか い われなに な けだしわ さくもつ おさ ところ またい</sup> 彼自ら忖りて曰えり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき處なし。又曰えり、

<sup>われか な わくら こぼ さら おおい もの た こうち わ ことごと こくもつ</sup> 我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、此の中に我が悉くの穀物と

<sup>たから あつ わ たましい い たましい なんぢ たねん ため たくわ おお たから</sup> 貨物とを聚めて、我が靈に謂わん、靈よ、爾には多年の爲に蓄えたる多くの貨物

<sup>やす くら の たのし しか かみ くれ い むち もの こんやなんぢ</sup> あり、息み、食い、飲み、樂めと。然れども神は彼に謂えり、無知なる者よ、今夜爾の

<sup>たましい なんぢ もと しか なんぢ そな ところ もの だれ き およ おのれ ため</sup> 靈を爾より索めん、然らば爾が備えし所の者は誰に歸せんか。凡そ己の爲に

<sup>たから つ かみ おい と もの か ごと</sup> 財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思ひめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、樂しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ